

高いのを思い出して、その中国人から酒石酸を手に入
れ、新京の町で重曹を買い集めてサッカリンを買っ
て、皆でインスタントのサイダー作りをしたのです。
このサイダーを中国人の町で売ったところ非常に受け
て、一躍金がどんどん入ってきて、これで服装、持ち
物を整えました。そんなことで孤児院にも寄付などし
て、皆で帰って来ることができました。

本当に戦争というものは、いかに悲惨かということ
です。それは戦争をやっている兵隊も悲惨ですが、同
時テロで報復を受けているアフガンと同じように、あ
れだけの犯人を捕捉するために、各国が挙って参加し
て、その被害を受けるものは一番に国民なのです。国
民が一瞬にして爆撃の被害を受けるのです。

こんなことが本当にいいのか、私は痛切に考えてい
ます。自分も捕虜収容所で残酷な目に遭いましたけれ
ども、それ以上に迷惑するのは何の罪もない一般人の
なのです。

今でも残留孤児が残っているのです。父母と別れた

当時一歳の子は、もう六十歳近くになっているので
す。

この戦争とは何だったのだろう。戦争のない平和な
国を作るには、平和を担うには、一体何をすればいい
のかということを、もっともって考えて行かねばいけ
ないと思います。

三たびの軍務

私の歩んできた道

岐阜県 堂前 寅次

大正五（一九一六）年四月十日、吉城郡宮川村打保
で、桜井の家に生まれたが、親同士親交があり、堂前
家の子供となった。従って私は物心ついた頃から堂前
家の子だと信じつつ成長した。私が小学校六年生の卒
業間近に、父母から飛騨中学へ行けと言われ、高山市
の伯母の家から通えばちょうどいいとのことであっ
た。しかし、伯母は大変に行儀作法の厳しい人で、そ

の気になれず高等科に進んで、二年の三学期になって、今度は自分から中学へ行きたいと父に話をし賛成を得たが、母は、もう二年間も損をして今更行きたいなんて、と反対され、遂に私の進学の夢も消えてしまった。

そのため、毎月講義録（今の通信教育）を買って勉強しながら、青年学校に週三晩、丸四年間欠かすことなく通い卒業することができた。その間、土方をしたり、トンネル工事場で働いたりして私は青年期を過ごしたのであるが、いよいよ軍隊に行く年齢となった。

徴兵制度と兵隊検査

戦前は「徴兵の義務」という国民の三大義務の内の一つで、男子が満二十歳になれば必ず徴兵検査を受けて兵役の義務を果たさねばならなかった。この検査によって甲、乙、丙種の三つに分けられ、甲種に合格すれば必ず二年間の軍人としての教育を受けなければならなかったのである。また乙以下に判定された人は、第一補充兵または第二補充兵として、戦時に必要に

なった時に召集されるが現役兵としては入隊することにはなかった。甲種とは身体強健で身長、体重共にその規格にはまる人の事である。このころは男子として生まれた以上、やはり甲種合格になることが誇りでもあり、また名誉な事でもあったのである。

私も昭和十一（一九三六）年七月に兵隊検査を古川小学校の雨天体操場で受験した。当時坂下村長は小倉福之助という人で三十五年も村長を勤めた、大変に村民からの信望のあった人でした。この頃は役場に兵事係というのがあり、徴兵に関する一切の事務を受持ち、兵事に関する何かがあるごとに出ていかれた。この兵隊検査にも、村長と兵事係に引率され、我々受験者十九人が、まだ開通して間もない高山線の汽車に乗り、喜び勇んで行ったのである。

この日に甲種に合格したのは九人であった。合格しなかった人は検査終了とともに兵事係と一緒に帰って行くし、私たち甲種合格した者は、従来の慣習に習い村長や兵事係の制止に耳もかさず、午後四時の汽車で高山へ行き、国分寺の「いろは」という料亭に入り、

酒宴を開いて大騒ぎのあと、そのまま泊まって、翌日また高山で遊び夕方家に帰った。

次に当時の検査の模様を少し話してみよう。朝、吉城郡内から集まった二十歳の青年が、小学校の各町村に割り当てられた教室に入る。検査場はあの広いがらんとした講堂で、何の区切りもない所で、軍医だけが各机の前の椅子にどっかりと腰をおとしているだけである。ただ一カ所だけ、それもお尻の検査をするところだけがカーテンがあり、軍医と看護婦が一人いる。他には何も見当らず、あると言えば体重秤と身長計があるだけで誠にだだっぴろいだけの所である。私達は九時からで脱衣場へ行くと衛生兵が一人いて、我々受験者にいろいろと指示を与えている。そこで丸裸になると衛生兵から十五センチ角の白い前掛けを渡され、それがパンツ代わりである。一番初めに身長と体重測定で始まり、次の軍医の前に行く、目、耳、鼻、口の順に終わり、異常がなければ軍医が軍隊式で大きな声で「ヨーシ」と言われ、次の軍医の前に立つ。ここで

は内科関係の診察が行われ、再び「ヨーシ」となり、次の軍医の前に立つ。

検査は一応終わりとなり、最後に連隊区司令官の前に行く。住所氏名を問われ、大きな声で答える。その後、司令官は腹の底から響くような声で「ヨーシ！甲種合格」と言い渡される。この時の感激は言葉にならぬ位にジーンと来て涙の出るくらい嬉しかった。

広島へ集結し、満州の関東軍へ入営

昭和十二年二月に「三月二十六日に広島に集結せよ」との通知を受けて、兄の由造に付き添われて出発し、大阪の叔父の家に泊まり、翌日大阪を見物して午後広島に向かい、指定の宿に宿泊する。二十七日身体検査があり、冬服の支給を受けて翌二十八日の午後乗船、いよいよ出発である。「ハルピン丸」という大きな客船で、私達のような田舎者にとっては初めて見る大きさに吃驚、長さも一三〇メートル程もあり、四〇〇トンとの事であった。

私達六人は二等船室だとのこと、中へ入ってみてま

た吃驚、どこかのホテルへでも入ったようである。他の人達はどんな所かと下の部屋へ行ってみたら百人も入れるような大きな部屋であり、私達は連が良かったんだと気が付く。割り当てられた部屋の確認をして、荷物を置いて甲板に出てみると、兄由造がすぐ船の近くにいて、白いハンカチを力いっぱい振りながら「体に気をつけてしっかりやれよ」と励ましてくれている。私も初めて海を渡って外地へ行くので、もしかしたら二度と会えないかもと思い「後を頼むぞ」と答え、このときばかりは私も思いきって泣いて答えた。

やがて汽笛を鳴らしながら静かに岸壁を離れたが、兄のハンカチを振る姿がみるみる遠ざかって行く。船の別れは寂しく何となく切ないような感じである。船には慣れている者は、玄界灘を通る時も面白がっていたが、私は船酔いがあることさえ知らない田舎者であり、夕食に出た食事は大変に豪華な物で、こんなに美味しい食事が出るのかと嬉しくなり、全部残らず食べてしまった。

玄界灘へ差しかかったら船が上下左右に揺れ始め、

気持ちが悪くなって全部吐いてしまった。それ以来四日間全く食事は受け付けず、三日の朝大連に着いてサイドーを買って飲もうとしたがこれも受け付けず、五日の朝龍鎮の部隊に着くまでの五日間何も食べられなかった。それでも汽車に乗ったら楽にはなったのだが何も食べたくなかった。外を見たら黒い猪がいて、「ああ、あんなところに猪がいる」と言ったら引率の軍曹さんが「あれは猪ではなく黒豚なんだよ」と教えてくれた。黒い豚さえ日本では余り見ることもなかったのも、やっぱり田舎者で何も知らない自分が恥ずかしく、もっと勉強をしなければならないことを痛切に感じたのであった。

入隊・戦友、一期の検閲

宇品港を出港以来、丸々五日間も食べず、へとへとになっていたが、三月五日の朝四時頃に満州国龍江省龍鎮駅に着いた。しかし緊張していたのか、またやっと着いたという安堵感からか、何かしら今までふらふらしていた体が急に楽になって、駅から兵舎までの二

キロの道も普通と変わらぬ位に歩けた。汽車から降りた時に、急に顔の当たりがゴワゴワと何だか変な感じがしたので迎えの人に聞いたら「今朝の気温が零下三八度もあり、そのために吐く息が眉毛等で凍り、そのためにゴワゴワするのだよ」と教えてくれた。それを聞いて、これは酷い所へ来たものと、皆で吃驚したのであった。

兵舎はまだバラックであり、室内を見ると所々の釘の頭が白く凍っているのが見える。隊に着いたら早速自分の戦友である二年兵が紹介された。その人は中山寅雄という人で、毎日北安市の師団本部へ連絡兵として通っていた。私の身体検査は師団本部の病院で行うことになり、六日の朝、戦友に連れられて二時間も掛る本部の病院へ行ったのである。身体検査の結果「即日帰郷」にならぬかと心配で心配でならなかったが、幸いにも「即日帰郷」にはならず本当に嬉しかった。それまではもし「即日帰郷」にでもなったら恥ずかしくて帰るわけにも行かず、もしそうになったら満州に残って仕事につこうと覚悟はしていたのであった。

軍医さんから「ヨーシ、大丈夫だ、二十日間の連兵休みだ」と言われたが、私にはその意味が分からず、何のことやらと思っていた。午後四時頃に帰り隊長に報告に行ったら、隊長さんから「どうだった」と言われ、二十日間の連兵休だと言われましたと答えたら、側にいた人事係准尉さんが「それは良かった、二十日間休めということだ」と説明してくれた。翌日事務室へ行き二十日間も何をしていればいいのですか、と聞いたたら「まあ、茶坊主でもしていれば、その内に元気になるから」と言われた。軍隊は厳しいと聞くがこうしたやさしい所もあるんだなあーと思い、なにかしら心の中がホッとした気持ちになった。

二十日間は夢のように過ぎて、毎日忙しい、忙しいで勉強をする暇さえ殆どない有様で、朝は六時に起床し、寝具を畳み、掃除、点呼、食事あげ、食缶返納、食器洗い、洗濯（戦友の分までもしなければならぬ）、食事が済めばしばらくして、演習に整列と声がかかる。昼も夕食後と同じで風呂に、洗濯、兵器の手入れと次から次へと毎日が目の回る程に忙しく、その

うえ二年兵は事件発生後出勤して、軍馬二十頭の世話や手入れと毎朝の寝奠替えに馬の運動と、それはやりきれない程忙しかった。

一期の検閲も終わり、どうにか上等兵候補になることができて、やれやれと少し落ち着き、暇も作れるようになってきた。お陰で剣道も上達し、二年兵にも對抗できるようになった。また列車警乗や匪賊討伐に出たりするうちに一年は過ぎ、昭和十三年三月一日に私と藤田君と二人が佐長勤務上等兵に進級することができて、嬉しくて早速父母に手紙で知らせたのであった。

部隊の編成（昭和十三年三月）

昭和十三年三月、部隊は北安市の師団本部に集結して、部隊の大編成が行われた。戦時編成だった。我々の各中隊が二つに分かれ、私たちはもとの教官、山本玄房中尉と一緒に北満の国境、ロシアの国境の町、ブラゴエチェンスクの対岸にある暖琿という町に行き国境守備に付いた。宮崎中隊は秘密で行く先は聞か

かった。

暖琿の二年間国境守備に付き、その間年に二、三回、一カ月程ずつの討伐に行ったが、主に国境守備が任務であった。藤田君とは大の仲良しで、伍長になるときも、軍曹に進級するときも一緒に兄弟のようであった。いつも六畳程の部屋に一緒に住み、交代で勤務をした。そして朝の交代時には夏ならスイカを買ってきて置いたり、また小さな桶に白菜を漬けて床下に入れて置き、時々出して食べたりしていたが、初年兵教育の期間だけは私は勤務につかなかったので一緒に居るわけにはいかなかった。

私が岐阜の陸軍病院に居る頃に一度手紙をくれて、結婚をしたが体が弱くて一生の不覚であるという事を知らせて来たが、それ以来音信不通となり消息も分からず残念でならない。

任官試験だ「勉強せよ」と言われて

正月も過ぎて少し落ち着いたある日、中隊長から呼び出しがあり、「討伐に行け」と言うのかと行ったら、

藤田君も来ていて、中に入るなり隊長から、今度連隊で伍長の任官試験があるから今から勉強をして二人とも受かるようにせよとのこと。「任官するのは連隊で十一人だから油断をせぬようにしっかりと勉強をしておけ」との事であった。私と藤田は顔を見合せて、命令調で言われては従うしかなく、ただ「ハイッ！」と大きい声で頑張りますと言って隊長室を出た。

さあ大変な事になったと思いながらも何から勉強をしたらいいのか分からず、そのまま教官の大堀中尉の所へ行き、事の次第を話したら、教官も既に知っていて「試験には何が出るやらも分からないが、まず基本的な事はしっかりとやって置くように」と言われ、分からぬときはまた宜しくお願いしますと言って自分の部屋に帰った。

受験のチャンスを与えてくれた事に対しては本当に嬉しかったのだが、さて昼は演習で疲れ、勉強はいつも夜で中々進まない。そうかといって演習を休む訳にもゆかず、仕方なく毎晩一カ月間、隊長室か教官室か、夜、空いている部屋へ入って、十一時か十二時頃

まで二人で一生懸命に勉強した。若いから続いたとは思いますが、部屋の戦友たちは白川夜船でグースカグースカ寝ているし、それを見ると悲しくなる程に羨ましくて、なぜこんなにまでしなければと泣きたくなる位であった。

そうかと言って不合格にでもなれば恥ずかしいのと、教官や中隊長に顔向けができないような気がするし、何としても合格を目指すしかないと思い自分を戒めながら頑張ったのであった。二月上旬になってやっと基礎的なことはどうにか頭に入り、少し落ち着きが出てきた。試験は二月十六日と十七日の二日間と記憶しているが、一日目は実兵指揮と口頭試問であり、二日目は筆記試験で午前中は基礎的な事項について、午後からは新聞に出ているような問題で「国境守備と現在の日本の現状について記せ」と言う問題であった。

今まで考えたこともないような問題で、これには何を書いてよいやらも分からず、色々と考えた末、時間いっぱいかけて書き上げて出したが、二人とも閉口し「合格も不合格も問題でなく、もうどうにでもなれ」

との思いで試験場を後にしたのであった。会場を出てから藤田君に聞いたら「もう駄目だよ、諦めた」なんて言っていた。

夕方教官に報告に行き「どうだったかね」と問われ、事の次第を話したら、教官も「もっと社会勉強をしておけばよかったな」と言って笑ってみえた。それから二月いっぱい待ったが何の音沙汰もなく、やっぱり駄目だったな、と諦めていた。

三月三日になっても何もなく、本当に駄目だと思っていたら、三月五日の夕方の命令でやっと十一人の合格発表があり、藤田君と私の名前があり、吃驚するやら嬉しいやらで二人で抱き合って喜んだのであった。早速二人で中隊長や教官に復命に行き、お礼を述べ、隊長や教官から「良かった、良かった、おめでとう」とお褒めの言葉をいただいて自室へ帰った。

帰ったらその日の内に中隊長命令で堂前伍長は「本日より初年兵教育を命ず」との下達があり、部屋も下士官室へと代り、何かしらこそばゆいような気持ちにして半月程は照れくさい気がした。それから半月した

九月一日付けで軍曹に任官したのであった。

初年兵の教育係を受けると色々な仕事があり、夜十一時前にはなかなか寝られず（当日の指導実施の復命や、翌日の指導計画、その他の事項）大変ではあるが、初年兵たちが弟のように可愛くて、とても楽しい仕事であった。初年兵教育を四年程やったが、二十数人の人を預かるのだから責任もまた重大で、間違いないようにと神経は使うが、私にとっては自分にも教わるものが多くあり、大変といえ非常にやりがいのある仕事で実に楽しい仕事であった。

満期除隊により帰宅

三月二十日、長期服務者三十数人（本当は六十人くらい居たのだがノモンハン事件で戦死傷して少なくなった）が現地で満期となり、各人が旅費七十円ずつ支給されて部隊を後にした。乗車賃は広島から打保まで払っただけで、支給された旅費は半分以上が小使いとして残った。大連からの船は大きな貨物船の「玉鉾丸」であったが、当日は至って海は静かであり、入隊

の時の様に揺れもせず、順風満帆と言うか実に快適な船旅であった。船足は遅く三日余りも掛かったが、やがて瀬戸内に入り掛けたところに、誰かが大きな声で「オーイー！ 日本が見えてきたぞー」と叫ぶと、数百人の兵隊が一斉に甲板に上がって来て、またその中の誰かが突拍子もない大きな声で「おかあーさんのオッパイが飲めるぞーっ」と叫び甲板上是割れんばかりの大騒ぎとなった。久しぶりに見る瀬戸内海の山々は山水画を見るようですばらしく、また山の緑も目に染みるようであり、満州では見ることでできない風景であった。

やがて二の島での検疫も終わりに上陸し、それぞれが東へ北へと分かれて、懐かしい夢にまで見たわが家へと向かった。私も岐阜で乗り換えて高山へ着いたら、母が迎えに来てくれていて、久しぶりに見る私の手をしっかりと握り、喜びの涙がいっぱい言葉にもならぬくらいであった。三年間の積もる話で夢中になり、車掌さんが側に来て「打保ですよ」との声に、急いで荷物をもって降りたのであった。

降りて見ると、駅前の広場は学校の生徒や役場の人や村民の皆さんがお迎えに来ていて下さり、村長さんの挨拶の後、私も皆さんの前へ出て留守中のお世話になったお礼やら、お出迎え下さったお礼を申し上げて、親戚の方々と一緒に、夢にまで見た懐かしい我が家へ帰った。やっぱりどんなあばら家でも二十年間も育った家が、一番心やすらぎを感じ落ち着ける所であると思った。

帰郷、結婚、二度目の召集

帰ってからは青年学校の指導員として県の嘱託となり、週三日位学校へ行き、後は家業である農業をしながら、また暇があれば土方にも出ていた。昭和十六年三月にとめと結婚したものの六月に、再び召集令状が来たために入院中の妻も退院し、一週間で私は岐阜の部隊へ行った。一カ月程いて再び満州の遼陽市の第三一八部隊の松沢隊に入り、ここでも初年兵教育をすることになり、二年間務めて昭和十八年五月に召集解除になった。

この間スキー選手として一個小隊に加わり、現役時代にいた暖陣という比較的雪の多い所へ、一カ月程選手の強化練習に行った。そこでは半日は練習、午後は風呂に入り休養という実に楽しい日を過ごした。昭和十七年二月に、関東軍二十四個師団の大会が通河市外で行われた。これには十五日間出張として参加したが、選手だけでも七百四十人も集まった大きな大会であった。

昭和十七年の夏には、工兵隊のジャングル通過演習というのがあり、ソ満国境の大森林へ一個分隊を指揮して行った。仕事そのものは殆ど命令受領等のことであり、工兵隊の仕事が珍しく、私にとっては大変な勉強になり、実にいい思い出となっている。この時に初めてブルドーザーや大木を切るチェーンソーという機械のあることも知った。

こうして二度目の兵役も無事に勤めて、昭和十八年五月に、岐阜の留守隊を経て帰宅した。このときは朝鮮半島を縦断して釜山から門司港に上陸して帰った。帰ってから京都のある学校へ行きたくなり、母に相

談したら「せっかく帰って来たと喜んでいるのにまた学校に行きたいなんて言わないで」と、淋しそうに言われるので、私もこれ以上親に苦勞を掛けてはいけないと思いい、それ以後はこうした話は出さないことにした。

昭和十九年六月 三度目の召集

戦争も長期化して物資も枯渇状態になり、自動車も木炭ガスで走らねばならなくなり、飛行機も燃料不足となり松根油が必要というところで、松の根を掘ってヤニから燃料を作るところまで追い込まれ、昭和十八年頃には、製炭業者も一躍、国策上欠くことのできない大事な産業となった。

私も妻と相談して、十五キロ入りで六十五俵もできる窯を築いて、大体月に窯半程出荷しつつあった。運び出すのは七分は妻の背中であり、残りの三分が私である。木を切ったり割るのは私の主な仕事であった。

昭和十九年六月に三度目の召集が来て、鋸や斧などは山の現場にそのままにして、翌々日に普段着のまま

の出征であった。その頃には秘密動員といつて見送りもなし、ただこっそりと出て行かねばならず、ちょうど私が行く少し前にサイパン島が全滅したばかりで、私も今度こそは到底生きて帰れることはないだろうと覚悟して、妻や父母に別れを告げて発ったのであった。

岐阜の部隊に入り第七中隊に配属になり、いつ、どこへ行けと言われるやらと思っていたら、三日目に人事係から「留守隊に残って仕事をしてもらうから」とのこと、結果は兵器係をやることになった。仕事は助手の上等兵がやってくれるので命令受領に行くぐらいであった。

中隊長から演習で小隊長の指揮を命ぜられた時、大きなイバラ原に飛び込んでしまい、手や顔が傷だらけになり、少し痛いと思ったが、翌朝起きたら顔のあたりがむくんでいてごわごわした感じだった。

以後三日経ち、久美愛病院の組合長だった軍医さんが診断に見え、私の病気は怪我をした所からバイキンが入り腎臓に障り「こんなことをしているとお前は死

んでしまうから、明朝入院するように」と指示された。この時、この先生で私は助かるかもしれないと思いい、何かしら涙がこみあげて来た。その晩は気が楽になりぐっすり寝込んで、朝まで知らずにいた。

十月一日朝六時に衛生兵が担架を持ってきて「病院に行きますよ」と、そこまでは知っていたが、その後のことは知らず、午後二時頃目が覚めて「アッ、俺はどこへ来たのか」と言って跳ね起きようとしたら、軍医から「動くな！ 死んでしまうぞ」と叱られて再び午後八時まで寝込んでしまった。目が覚めて見たら看護婦が二人いて「目が覚めましたか」と、声をかけられた。

私が入院する前日小便は一滴も出ず、血尿が少し出る位で、体重は四キロも増えていて気が遠くなりつつあり、苦しいとか、痛いとか、辛いとかは無く、ただボーヤとして寝ているだけであった。

陸軍病院の入院は、昭和十九年十月一日であったが、入院生活は続いた。十二月八日は、大東亜戦争が始まって四年目、第三週年、第三十六回目の大詔奉戴

日である。病院でも八時三十分から愛国寮において大詔奉戴式が挙行され、式終了後全員で北一色町の吉野神社へ参拝に行った。

今日あたりは敵のB 29が来るかもしれない、多分来るだろう、と皆で噂をしていたが夕方になっても来なかった。「なあーに、来るなら来てみよ、米機がなんだ」と意気まいている兵隊もいた。

私は何だかこの戦争は負けそうではない、中隊にいる時、連隊の兵器庫の係をしていた時、南方へ行く兵隊に持たせる銃や剣など五人に一丁しか持たせることができなかったことや、連隊の兵器庫の中には兵器らしい兵器が無かったことを知っているからである。でもこの頃、負けるなどというものなら、すぐに憲兵が来て、お縄となるので、そのようなことは言えなかったのである。敵のB 29がこなかったから、毛布を持って退避壕へ入ることもなく幸せであった。

年末から正月にかけて、説田軍医から飛驒方面は大変な大雪で、退院する時が来ても雪が多くて汽車が不通になったら、高山以北へ帰ることは思い止まるよう

にと伝達された。何で俺はあんな豪雪地帯に生まれたのだろうと悲しく思った。高山以南の人や、雪の無い地方の人は、三十一日には皆外泊に行き、病室はひっそりとして淋しくらいになった。

そのような病院生活をしていると、私が再三再四お願いしている「居宅療養して、一日も早く病気を治して再度奉公したい」ことに對し、軍医さんは「お前の言うことも良く分かったから、一月十日付をもって居宅療養の目的で帰れるようにするから、養生に専心して再び奉公に上るように」と手続きを懇切丁寧に教えて下さった。

十日の朝、久しぶりに起床ラップで目を覚まし、点呼には出ず、八時半にそれぞれに挨拶を済ませて、懐かしい部隊の衛門を後にした。